

ムをやりたいと。よそでばかり世話にならずにやるべきじゃなからうか、といったような気もしまして、会う人何人かにそういうふうな意見も聞いてみますと、日本はとても遠過ぎて、まず行く人は少ないし問題にならないだろうという返事ばかりが返ってきまして、おやりなさい、賛成ですという返事はなかったわけです。それから数年たちまして、それでも、ヨーロッパの似たような場所の近所でやっているようなことが依然として多かったわけではありますが、IUPACの委員をやっていた

頃、日本のIUPAC関係者に、日本開催について聞いてみましても賛成の意見が得られませんでした。それでIUPACの高分子の会に出席した時に、日本で開催したいがどうかと、プライベートに申し出てみたわけでありました。そうしたらインドが、「自分のところでもやりたい」とのことで、その時はそれで話が終わりました。いろいろ考えて、1, 2年後に「じゃ、一緒にやらないか」とインドに言ったら、委員会の出席者の大半は一緒にやるということは不適当だという返事でした。そこであらた

めて正式に申し出をして、賛成が得られたわけです。どこと競争ということなしに1966年に国際シンポジウムを日本でやるというふうに決定したわけでありました。日本開催については、化繊協会、日化協などが応援してくださって、皆さんのご協力でもあまうまくいったんではないかと思えます。やっぱり荒井君の推進力は非常に効果があったと思えます。それから帝人の大屋晋三さんが委員長を引き受けられ、大屋夫人も一所懸命にバンケットやレディス・プログラムの時にはやっていただきました。

三枝 ありがとうございます。高分子学会がはじめて大きな国際学会を主催し、その運営も大変うまくゆきました。今でもいろんな国際研究集会の折には、外国の方から非常に高い評価を聞くわけでございます。この国際高分子シンポジウムがその後の日本の高分子の研究に大きなインパクトを与えたことと思えます。この問題につきましてご発言いただけませんか。

神原 確かにIUPAC開催の一つの効果として、われわれが外国の会議に行きましても、いろいろ親しく迎えていただけますし、それから、高分子だけでなく、多くの国際会議が日本で開かれるようになったのも、高分子のIUPAC開催が大きな成功の前例になったように思いますね。そういう意味でも非常によかったです。

岩倉 あの時、日本に来られた著名な高分子科学者が私どもの研究室などにもお見えになりまして、若い人たちと積極的に討論するというような場も持ったものですから、若い人たちがあの時のことを非常によかったというふうに今でも回顧しております。そういう意味では日本の若手の科学者たち

第26回国際純正応用化学会議

第26回国際純正応用化学会議は1977年9月4日から10日まで、東京赤坂地区において、日本学術会議、日本化学会、日本薬学会、日本農芸化学会の共同主催という形で開催された。参加者数は合計3,302名、このうち639名は海外53カ国からの参加者であった。

9月5日、NHKホール、赤松秀雄組織委員長の開会宣言。音程の高い明晰な語調である。続くPlenary LecturersはP. J. Flory教授(Chemistry, Macromolecules and the Needs of Man)およびG. Porter教授(Pure and Applied Photochemistry)。お二人ともノーベル賞受賞の化学者である。

科学プログラムは合同シンポジウムと分科会とにわけて編成されていた。前者では、「人類福祉のための化学」という統一テーマの下に、世界の英知を集めて化学の多面的な可能性について討議することが目的であった。この中には高分子関係のテーマも多い。ミセル、液晶、膜、固定化酵素、芳香族ポリアミ

ド、医用高分子など。Sourirajan, Merrifield, Calvin, Morgan, Lyman, Maneckeら著名な科学者が合同シンポジウムに参加していた。もちろん高分子分科会にもOverberger, Ferry, Kabanov, Stille, Corradiniらを含む世界一流の研究者が多数勢揃いした。

高分子学会は、この26回化学会議に対し、側面的な協力という立場をとっていた。9月5日夕には、高分子学会名誉会員懇談会を開き、Flory, Huggins両名誉会員を招待した。このとき、80歳を目前にして意気軒昂、あれほどお元気だったHuggins先生も昨年末、天に召されてしまった。

高分子学会はまた、9月7日、IUPAC高分子関係役員との懇談会の場を設けた。Smets, Kabanov, Bamford, Benoit, Jedlinski, Corradini, de Vriesの諸博士が一堂に会し、ポリマーファミリーならではの心あたまるひとときであった。

鶴田禎二(東京理科大学工学部・教授)